



TITLE:

右肺扁平上皮癌と左腎盂移行上皮癌の重複癌の1例

AUTHOR(S):

窪田, 理裕; 久島, 貞一; 伊藤, 勇市; 立石, 宗隆; 清水, 斎; 住田, 臣造; 本間, 英司; 鈴木, 知勝

CITATION:

窪田, 理裕 ...[et al]. 右肺扁平上皮癌と左腎盂移行上皮癌の重複癌の1例. 泌尿器科紀要 1988, 34(5): 866-869

ISSUE DATE:

1988-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/119566>

RIGHT:

右肺扁平上皮癌と左腎盂移行上皮癌の重複癌の1例

市立釧路病院泌尿器科（部長：伊藤勇市）

窪田 理裕，久島 貞一，伊藤 勇市

市立釧路病院麻酔科（部長：本間英司）

立石 宗隆，清水 斎，住田 臣造，本間 英司

釧路日赤病院病理（部長：鈴木知勝）

鈴木 知 勝

A CASE OF DOUBLE CANCER: RENAL PELVIC TRANSITIONAL CELL CARCINOMA AND LUNG SQUAMOUS CELL CARCINOMA

Michihiro KUBOTA, Sadakazu HISAJIMA and Yuichi ITO

*From the Department of Urology, Kushiro General Hospital
(Chief: Dr. Y. Ito)*

Munetaka TATEISHI, Hitoshi SHIMIZU,

Shinzo SUMITA and Eiji HOMMA

*From the Department of Anesthesiology, Kushiro General Hospital
(Chief: Dr. E. Homma)*

Tomokatsu SUZUKI

*From the Department of Pathology, Kushiro Red Cross Hospital
(Chief: Dr. T. Suzuki)*

A 69-year-old woman was admitted with the chief complaint of gross hematuria and left flank pain ten years after curative right pneumonectomy. Retrograde pyelography showed a filling defect of inferior calyx. Computerized tomography revealed a solid tumor with a low density area arising from the left kidney. The tumor was demonstrated hypovascular by angiography. Left radical nephrectomy by a transabdominal approach was performed. Histological diagnosis was primary transitional cell carcinoma of the left renal pelvis largely replacing the renal parenchyma. Twenty six days after the operation she was discharged. Our case was of double cancer consistent with Warren and Gates criteria¹⁾ and was classified into the nonsimultaneous case according to Moertels criteria²⁾. Double cancer of the lung and renal pelvis is very rare and our case seems to be the 7th in the Japanese clinical literature.

Key words: Double cancer, Lung cancer, Renal pelvic cancer

緒 言

われわれは最近，非常に稀な肺癌と腎盂癌の重複癌の1例を経験したので報告する。

症 例

患者：69歳，女性

主訴：肉眼的血尿，左側腹部痛

既往歴：1984年7月右肺限局性肺癌にて根治的右肺

全摘除術を受けた。病理組織学所見（Fig. 1, 2）は低分化扁平上皮癌であった。

家族歴：特記すべきことなし

現病歴：1985年10月21日，前記主訴にて当科初診。初診時，膀胱鏡検査にて左尿管口よりの出血を認め翌日，精査目的に当科入院となった。

現症：身長 145 cm，体重 36.6 kg，血圧 122/70 mmHg，脈拍 84/min，表在リンパ節は触れず，胸部は右胸郭の陥凹を認めるが，左胸部は打聴上異常な



Fig. 1. 右肺全摘標本剖面

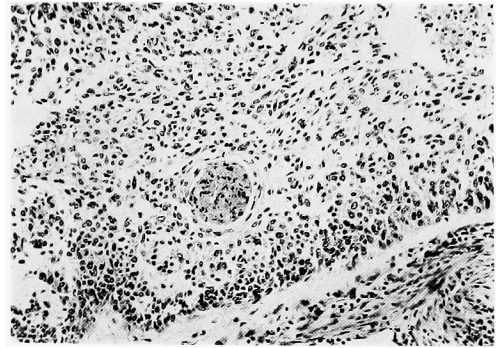


Fig. 2. 肺癌：病理組織所見；扁平上皮癌

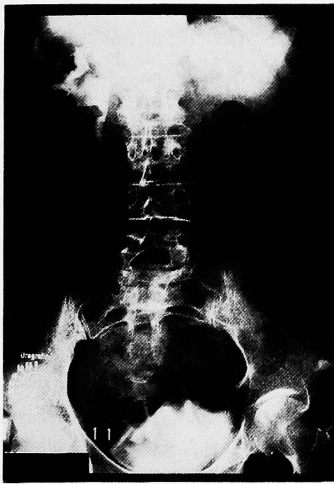


Fig. 3. IVP：左腎の下腎杯の描出が得られなかった。



Fig. 4. 左逆行性腎盂造影：左腎の下腎杯の充満像は得られなかった。

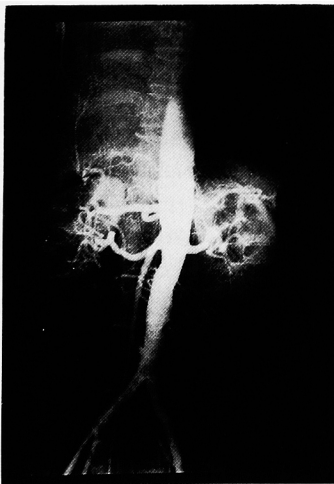


Fig. 5. 腹部大動脈造影・左腎下極に血管に乏しい占拠性病変の存在が示唆された。

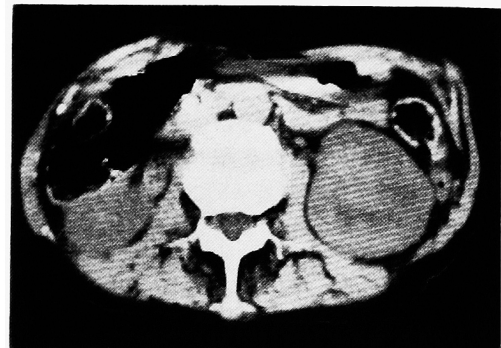


Fig. 6. 腹部 CT：第Ⅲ腰椎下縁でのスライス：左腎下極に充実性の腫瘍が在り内部に低吸収領域が不均一に分布していた。

し、腹部は左側腹部に手拳大の弾性硬、表面平滑な腫瘤を触知。腫瘤は呼吸性移動を有し上部境界は不明。

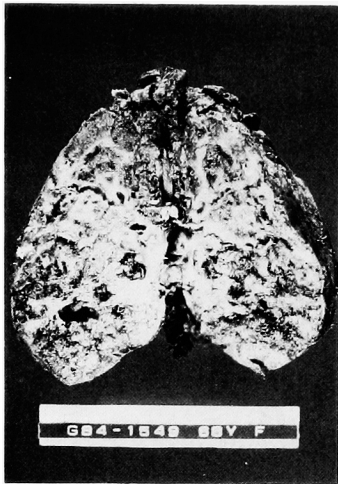


Fig. 7. 左腎摘出標本剖面：腎下極を中心に全体の1/2以上が充実性腫瘍により置換され、内部に出血壊死を伴っていた。



Fig. 8. 摘出標本の病理組織所見：組織学的には grade 2 の移行上皮癌であった。

肝脾は触れない。

検査所見 白血球数増多，赤沈値亢進が見られ，CRP は(++)であった。また呼吸機能検査所見上，混合性換気障害のパターンを示していた。

X線検査：胸部X線検査上，気管は右に偏位屈曲し，左肺は代償性肺気腫を呈していた。IVP 上，左下腎杯は描出不良（Fig. 3）で，逆行性腎盂造影上も，充満像が得られず（Fig. 4）腹部大動脈造影にて左腎下極に，血管に乏しい占拠性病変の存在が示唆された（Fig. 5）。Fig. 6 は第Ⅲ腰椎下縁での CT スライスであるが左腎下極に充実性の腫瘍が在り内部に低吸収領域が不均一に分布していた。また，他の諸検査上，骨，肝，脳などへの遠隔転移は否定された。術前，IPPB による十分な呼吸訓練と中心静脈栄養により約4 kg の体重増加を得た後1986年1月20日，左腎腫瘍の術前診断にて型のごとく経腹的根治的左腎摘除術を

Table 1. 重複癌（肺と腎盂）本邦臨床報告例：肺癌と腎盂癌の重複癌の臨床報告例は今だ稀でわれわれの検索し得た限りでは自験例を含めてわずか7例を数えるのみであった。

No.	報告年	報告者	肺癌	腎盂癌
1	1966	国立癌センター ⁷⁾	大細胞癌	移行上皮癌
2	1969	国立癌センター ⁷⁾	扁平上皮癌	移行上皮癌
3	1970	藤田等 ⁸⁾	扁平上皮癌	扁平上皮癌
4	"	藤田等 ⁸⁾	扁平上皮癌	扁平上皮癌
5	1983	平泉等 ⁹⁾	記載無し	記載無し
6	1984	寺井等 ¹⁰⁾	扁平上皮癌	移行上皮癌
7	1987	自験例	扁平上皮癌	移行上皮癌

施行した。摘出標本：7.5 cm×14 cm，300 g 剖面では腎下極を中心に全体の1/2以上が充実性腫瘍により置換され内部に出血壊死を伴っていた（Fig. 7）。病理組織学的には，grade 2 の移行上皮癌（Fig. 8）で所属リンパ節転移や，脈管内浸潤を認めず Grabstald ら³⁾の stage III と判定された。術後経過：術後一時呼吸不全状態と成り10日間の人工呼吸管理を行った後順調な回復を示し，1986年2月15日退院し1987年3月現在，元気に外来通院中である。

考 察

重複癌の判定基準は Warren & Gates (1932)¹⁾によるものが一般に受けいれられており，自験例はこの基準を満たしていた。また両腫瘍の間隔が臨床的に6カ月を越えると思われるので，Moertel ら²⁾の異時発生例に相当していた。

本邦における重複癌の頻度は森田らの剖検例による検討によると悪性腫瘍の3.3%⁴⁾であったといい，馬場らは年間増加率6.8～10.6%で増加傾向を示している⁵⁾という。しかし腎盂癌と肺癌の重複癌の報告は未だ稀で臨床報告例としては山本らの集計（1928～1965）⁶⁾中には見当たらず土屋らの集計（1964～1973）⁷⁾中の4例とわれわれが調べた検索中に2例の計6例をみるのみであった（Table 1）。ちなみに日本病理剖検輯報（1958～1984）¹¹⁾中に9例の記録がみられた。一方重複癌発生要因として，遺伝的素因，第1癌に対する治療の影響，平均寿命延長による発癌物質暴露期間の延長など種々考えられている¹²⁾が肺癌と尿路上皮癌の共通の危険因子として Kantor ら¹³⁾が相対的発癌率との関係より喫煙に注目しているのは興味深い。

結 語

最近経験した右肺扁平上皮癌と左腎盂移行上皮癌の

異時発生重複癌の1例を報告し若干の文献的考察を加えた。

本論文の要旨は第281回日本泌尿器科学会北海道地方会において発表した。

文 献

- 1) Warren S and Gates O: Multiple primary malignant tumors: A survey of the literature and a statistical study. *Am J Cancer* **16**: 1358-1414, 1932
- 2) Moertel CG, DocKerty MB and Baggenstoss AH: Multiple primary malignant neoplasms. *Cancer* **14**: 221-230, 1961
- 3) Grabstald H, Whitmore WF and Melamed MR: Renal pelvic tumors. *JAMA* **218**: 845, 1971
- 4) 森田豊彦：一般剖検例における重複癌と肺癌を含むものの検討。癌の臨床 **23** (11): 1033-1042, 1977
- 5) 馬場謙介：重複癌の統計とその問題点。癌の臨床 **17** (6): 424-436, 1971
- 6) 山本英男，七野滋男，佐藤太一郎，秋田幸彦，金井道夫，加藤岳人，片山 信，三浦由夫，加藤庄次，羽根 晃，永田盛隆，二村雄次：切除し得た胃と尿管の重複癌の1例。癌の臨床 **31** (2): 206-211, 1985
- 7) 土屋正孝，宮川美栄子，深見正伸，久世益治，堀越雄二郎，小野和男：泌尿生殖器系重複腫瘍にかかる統計的ならびに文献的考察。泌尿紀要 **6**: 517-529, 1973
- 8) 藤田公生，下里幸雄，馬場謙介：重複癌に関する考察を中心とした肺癌剖検例の泌尿生殖器系臓器の検討。臨泌 **24**: 1021-1027, 1970
- 9) 平泉 隆，笠原慶太，鈴木大次郎，成松 博，野口 久，会田秀介，中島宏昭，井出宏嗣，高橋昭三，藤本治道，塩川 章：重複癌（肺癌・腎盂癌）の一部検例。昭和医学会雑誌 **43**: 865, 1983
- 10) Terai A, Oishi K, Okada Y, Kawamura, J and Yoshida O: Transitional cell carcinoma in a pelvic kidney associated with recurrent lung cancer. *Acta Urol Jpn* **30**: 1641-1644, 1984
- 11) 日本病理剖検輯報第1～第27輯。日病理学会編，皐林書院，東京，1958-1984
- 12) 宇山 健，山本晶弘，淡河洋一：泌尿生殖器癌が関連した原発性多重性腫瘍。西日泌尿 **45**: 895-899, 1981
- 13) Kantor A, McLaughlin JK, Curtis RE, Flannery JT and Fraumeni Jr JF: Risk of second malignancy after cancers of the renal parenchyma, renal pelvis and ureter. *Cancer* **58**: 1158-1161, 1986

(1987年4月7日受付)